

## 実像と幻像：満洲の都市研究におけるパラダイムシフトと視覚資料の再考

19世紀末から20世紀半ばまで、現在中国東北地方である満洲はロシア、日本の植民地として支配された。半世紀を超えた植民地支配に伴い、東清鉄道会社や日本関東軍、また南満鉄道会社が満洲において経済、社会、人口などについて様々な調査を行いた。その膨大な記録に基づき、戦後旧満洲の植民地研究が発展してきた。それらのメモリアル遺産の中、地図、写真、ポスターなどの視覚資料は数が豊富であり、また直観的に植民地の容貌を表現するため、植民地の実態に関する研究に重要な役割を果たしてきた。

本発表は、先行研究をふまえ、近年満洲の植民地都市研究における歴史的なパラダイムシフトを指摘したい。まず、今まで満鉄の調査資料と日中関係を中心にした満洲の植民地研究は、中国語やロシア語の史料の発見と使用によって、国際的な視点から満洲の植民地支配の実態を把握することが可能になった。その結果、日中露の複雑な利益関係がどのように満洲の都市計画や建設に影響を与えたか動態的に再考する必要がある。

次に、満洲の植民地観光に関する視覚資料を取り上げ、一見すると「客観的」に見える写真や地図の中に含まれたまなざしの特徴と構成を分析し、改めて視覚資料の「客観性」を問い直し、その見方の重要性を強調する。